

元田永孚と明治二三年神祇院設置問題

沼田 哲

一 はじめに―国家神道の成立へ―

明治二三年一〇月は神祇官の復興の問題が神祇院設置という形で急速に政治課題として浮上した時であった。時あたかも帝国議会の開会を約二ヶ月後にひかえ、また一方では教育勅語も発布への最終段階にさしかかっていた。ところで教育勅語の起草から発布にその努力を傾注していた枢密顧問官元田永孚が、同時にこの神祇院設置問題にも関与していたことは、先学によっても指摘されているところであるが、本稿においては、元田永孚が如何なる関与をしていたかについて、筆者がこれまでに知ることができた若干の新史料（主として書簡）⁽⁴⁾を紹介し、併せて前記二つの問題に共通して見出すことができる元田の「国教」論についてもいささかの考察を試みたい。

周知の如く維新当初祭政一致の理念に基いて設けられた神祇官は、明治二年七月の官制改革で太政官の上位に置かれたが、早くも四年には格下げされて太政官中の一省となり、更に翌五年にはその神祇省も廃され、

教部省となったが、明治一〇年には教部省も廃止となり、神社を含む宗教行政は内務省中の社寺局が扱い、祭祀のことはそれ以前より宮内省中の式部寮が掌ることとなっていた。内務省社寺局は神社・教会・寺院の行政的統轄を目的とする機関であって、例えば神祇官・神祇省が「宣教」のことを掌ることを職掌とし、また教部省が「三条ノ教則」の宣布を重要な仕事としたことなどに対比しても、その役割の低下が明白である。また社寺局はその名の通り、神社神道を仏教との関係では同等の地位に置いて特別扱いしない、一つの宗教にすぎないものとして扱おうというものであったし、これらのことは、宗教行政が、例えば条約改正などの対外的配慮を加えられながら、「信教の自由」とか「政教分離」といった近代国家の思想原理をそれなりに反映させるものであったと評されるのである。⁽⁵⁾かくて明治初年以來の神道国教政策は崩壊し、以後神道の取り扱いについては、一種の「放任」状況を経て、新たな政策が探られてゆくのである。⁽⁶⁾

その画期となるのが、明治一五年一月の神官・教導職の分離である。「自今神官ハ教導職ノ兼補ヲ廃シ葬儀ニ関係セザルモノトス」との方針⁽⁷⁾は、つまり神社を宗教的行為から切り離し、神社神道は宗教に非ず、国

家の祭祀であるとの方針の表明であった。政府内においては岩下方平や海江田信義などの主導により、この教導職と神官とを分離し、「神道を以て宗旨と同視せず」、神道を宗教の上に立って包括的に民衆に対処する方向性が決定されていたのである。⁽⁸⁾以後この方針に沿った政策が次々と実施されてゆくが、このことが神社神道の国教化（国家神道の成立へむけて）の方向であったことは否定できない。ただ注意すべきは、明治一五年頃からのこの国家神道の成立への動向は、国家と神社（神道）の結合をはかるものでありながら、前述の明治初年の神道国教化政策の段階とは区別されるものであるという事である。神社（神道）は宗教にあらずという方針を掲げることは、政府にとっては一方では「信教の自由」

や「政教分離」の原則を保持するとの態度をとりつづけた上でのことでなければならなかったのである。そのことは、後に帝国憲法二八条において「日本臣民ハ安寧秩序ヲ妨ケス及臣民タルノ義務ニ背カサルニ於テ信教ノ自由ヲ有ス」と規定し、伊藤博文が『憲法義解』の同条の解釈において「国教を以て偏信を強ふるは尤人知自然の発達と學術競進の運歩を障害する者にして、何れの国も政治上の威権を用ゐて以て教門無形の信依を制圧せむとするの權利と機能を有せざるべし」と述べたところにも示されていた。とは言え、国家神道の成立とは、この明治一四・五年より二二・三年にかけて、来るべき憲法制定・議會開設に國民の政治参加へむけて、それに対応しうる政府側の体制の維持と民衆支配の方法の創出の爲の一連の施策の一つであったことは改めて言うまでもないであろう。「神道ヲ以テ信仰自由ノ宗教外ノ者トシ神社ヲ以テ尊皇愛國ノ精神ノ基礎ト定ムルハ、国会開始前ニ於テ確定セサル可ラサルナリ」との

千家尊福の意見は、神社関係者からの発言として、そのことを肯定したものと見えよう。その「尊皇愛國ノ精神」とは天皇主權・天皇支配の正統性を支えるものであり、二二年二月の憲法發布勅語において「我カ祖我カ宗ハ我カ臣民祖先ノ協力輔翼ニ依リ我カ帝國ヲ肇造シテ無窮ニ垂レタリ」と述べられ、また二三年一〇月三〇日に發布された教育勅語において「我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ……中略……一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ……下略」と述べられたような万世一系・万邦無比の国体と天壤無窮の神勅に拠る忠君愛國の主張に他ならず、これが国家神道の理論的（イデオロギー的）基礎として大きな役割を果たすことになるのである。⁽¹³⁾

以上の如き意義をもつ国家神道の成立に祭祀と宗教との分離を、制度的に明確化する措置が必要になった時期、つまり國民の政治参加に議會開設を目前に控えるようになった頃、政府の内と外とにおいて、いくつかの運動が展開されるに至った。大八洲学会・明治会・雑誌『国光』等に結集した人々の運動は、⁽¹⁴⁾政府関係者による上からの運動として、緊急課題として全国府県町村社の神官の教導職・布教師兼帯の全面禁止と、神社尊崇と宗教との関係をたち切るという二点、即ち祭祀と宗教との分離及び神道の国教化の実現との二つであったといわれる。⁽¹⁵⁾更にこれは下からの、全国の神官達の運動と密接に連動していた。神官同志会の結成と「郷村社処遇に関する意見書」等の建白、元老院への四百件にものぼる神社宗教分離の建白活動などは、その表われであった。⁽¹⁶⁾

そして国会開設を目的に政府部内で熱心に展開された運動こそが、神社尊崇を宗教から分離させ、神社の管轄官庁を内務省社寺局より分離さ

せ独立の官衙を設置させるといふ、神祇院設置運動として立ち現われるのである。

二 元田永孚の「国教」論

神祇官の復興要求は、明治四年の廃止以後断続的に主に神官達によって行われていたが、それだけではなく、例えば山田顕義⁽¹⁷⁾など政府要人からも提起されていた。明治一四年一二月二日付と考えられる山田顕義宛三条実美書簡は、次の如く山田の三条への働きかけをうかがわせてくれる。

「昨日神祇官調草案廻覧一見仕候。右ハ明朝会議ニ付シ候義ニ候得共、一応愚意申入置候。該官再設ニ付而ハ余程重大之事と存候間、篤ク御評議無之テハ不相成事と存候。就而は年内餘日も無之故所詮年内ニ決定と申訳ニハ難至と存候。實際至急ヲ要シ候事情ハ猶明日直ニ可承候得とも一寸此段豫メ申入置度如此候也。

実美

十二月廿三日

山田内務卿殿

また同一一四年一二月三日付の佐々木高行宛元田永孚書簡には「神道再隆・神祇官再興等、如何相成申候哉、皆々未ダ内閣中御議論ニテ上申無之内故、何共漏レ聞モ不仕、只々憂念致シ候……」とあり、神祇官の設置が明治一四年末頃にはすでに政府内で問題となっていたこと、また元田永孚がこの問題について強い関心をもち、神祇官再興を支持していたこと、などが示されている。

では、元田が神祇官再興に賛成であったことは、彼の思想とどのよう

に関わるものであったのだろうか。

明治四年侍読（のち侍講）として出仕して以後元田が一貫して「君徳輔導」を自らの職務とし、天皇が「有徳君主」として「宮府一体」のもとで「親裁」を行うことをめざし、いわば徳治主義的立場に拠って薩長藩閥の専制を批判し、侍補グループの中心として活動したこと、更には「君徳」による民心の感応の為には国民教化が重要な課題とされたこと、などについては、既に論じたこともあり、ここではくり返さない。侍補としての彼や佐々木高行らの天皇親政運動が、明治一二年末に侍補の廃止と共に挫折させられたにもかかわらず、元田は以後も天皇の側近としての立場から、自由民権運動の激化と政府の対応のあり方に強い危機感を抱いて、例えば憲法問題について発言し、また国民教化問題に力を注いだのであった。

いわゆる「教育議」論争⁽²²⁾において、元田が「自今以往、祖宗ノ訓典ニ基ツキ、専ラ仁義忠孝ヲ明カニシ、道德ノ学ハ孔子ヲ主トシテ、人々誠実品行ヲ尚トヒ」（「教学大旨」）と、教育の原則を主張したことを、伊藤などは「若シ夫レ古今ヲ折衷シ、經典ヲ斟酌シ、一ノ国教ヲ建立シテ、以テ世ニ行フカ如キハ……」（「教育議」）と反対したが、これは一面で元田の主張が「国教」の樹立とうけとめられ、更にそれが一つの宗教と誤解された結果であるとも考えられる。元田はこの点については強く反論している。元田はまず「欧州ノ事、臣之ヲ審カニセスト雖トモ、其帝王宰相以下人民ニ至リ、皆宗教ニ基ツカサル者ハ無キナリ」（「教育議附議」）と述べて、政教の分離は欧州においてもなされていないのではないかと指摘したのち、我国の「国教ナル者」はキリスト教や仏教

とはその質を異にし、「亦新タニ建ルニ非ス、祖訓ヲ敬承シテ之ヲ闡明スルニ在ル」という性格のものであるとする。ただ元田が更に「本朝瓊々杵尊以降欽明天皇以前ニ至リ、其天祖ヲ敬スルノ誠心凝結シ、加フルニ儒教ヲ以テシ、祭政教学一致、仁義忠孝上下ニアラサルハ、歴史上歴々証スヘキヲ見レハ、今日ノ国教他ナシ、亦其古ニ復セン而已」（以上「教育講附議」）などと、きわめて復古的色彩濃厚な事を述べるため、「国教」＝宗教との誤解をうけやすかったのである。しかし注意深く読めば、元田が「国教」を宗教と区別していたことはわかるであろう。元田は同時期に憲法論についてもその見解を固めていったが、例えば、明治一二年、元老院第二次国憲案に対する修正案を記しているが、その第一四条「国民ハ各自ニ信仰スル所ノ宗旨ヲ奉スルコト自由ナリトス然トモ民事政事ニ妨害ヲナスハ之ヲ禁ス」とある原文について、「然トモ」と「民事政事」との間に「国教及ビ」の字句を挿入し、更にその説明として「蓋シ国教ハ天祖以来皇帝ノ立ツル所ニシテ即チ倫理ノ教君臣誠敬父子忠孝夫婦順兄弟礼讓朋友信義ヲ本ニシテ正心誠意国家ヲ共済スルノ義ナリ」と述べ、「国教」とは「倫理ノ教」であり、宗教信仰とは矛盾しないものであるとしている。更にことさらにこのように「国教」を立るとするのは「此教軌近漸ク衰恭シ世ノ人或ハ我邦教無キ者トスルニ至ル故ニ方今立憲ノ際、此教ヲ明示シテ国民ヲシテ一般ニ茲ニ基本セシメンコトヲ要ス」という理由によるのだと論じている。このことからしても、元田の「国教」が教育と密接に関係をもちながら考えられたものであり、言い換えれば宗教とは次元のちがう性格のものであることがわかるであろう。

元田は以後も「国教」を確立すべく努力を続けていたようである。明治一七年七月、三条太政大臣に提出した国教についての意見書では次の如く論じている。

「方今之患。莫大於宗教。而治之洵難矣。蓋一言拒之。則開釁於外國。爭乱不可測。一言容之。則發乱於内地。暴激立至。其間不容髮。可憂可懼之太甚者。故宗教者。不問何宗旨。任民之所信。政府立於不拒不容之地。無所偏倚。據法處斷而已。然政府若無所主。則民無所置信。久之將無所立焉。故政府當有所主而自立也。所主何也。主國教也。所謂國教。亦非新設而強為也。即因固有而實行之也。夫我天子至誠一心。奉天祖而治天下。是億兆之所信而不疑也。我天子既尊奉天祖。則皇族大臣群僚百辟為凡臣民者。亦當尊奉天祖。固無論也。其奉天祖也。非禮拜祭祀虛文之謂也。即奉天祖之教也。仰立國體。明人倫。修道徳。達智識。愛君恤民。貫之以誠敬。是我天祖以來之教訓。載在國典。今天子與皇族大臣群僚百辟。一意奉之。確乎不拔。以率先億兆。則億兆亦將有所觀感而興起矣。……下略……」

この文の主意は、前述したところと基本的に同じである。「国教」とは「我天子」が「至誠一心天祖を奉ずる」ことにあらわれており、それは「天祖之教を奉ずる」ことであり、即ち「国体を立て人倫を明かにし、道徳を脩め智識に達し、君を愛し民を恤し、之を貫くに誠敬を以てす」ということであるという。「天祖之教」と神道との区別は必ずしも厳密ではなく、時に同一視されうるのであったが、紀記聖典化、天祖皇祖の崇拜などを通して天皇の神聖化をはかることは、神道と同じである。ただ注意すべきは「其天祖を奉ずるや、礼拝祭祀虛文之謂に非ざるなり」

との一句であろう。この点は前注⑩に言及した伊藤への「国教論」においても「天祖を奉ずることは、かの釈迦を奉じ耶蘇を奉ずるとはその道固より異なる。而して又祠官神職の徒の祭祀を奉ずるが如きにも非ざるなり、吾の天祖を奉ずるはその徳を奉ずるなり」と、同様に論及されている。二つの「国教論」において、「国教」が神官の祭祀とは別であると言われていることは、神道は宗教に非ずという主張を想起すれば、異とする必要はないのかもしれない。また一方では既に宮中の賢所などで天皇の親祭が行われ、文武官が参列し、また例えば憲法発布の祭の賢所の告文が官報に載るなど、神道は国家祭祀という性格を強く有していたということもある。元田の以上の如き「国教」論は、元田にとっては「教育学大旨」以来の懸案ともいうべきものであって、明治二三年に至り、教育勅語という形で、いわば教育（という限定された場）における「国教」確定の具体化となったのである。

三 神祇院設置運動の展開

第一節末尾で述べた如き神祇院設置の運動は、佐々木高行・山田顯義ら政府・権力内部からと、全国神官等からとの二つの相互に関連した運動として、明治二三年以降、国会開設以前を目途として活発に展開された。

佐々木高行は、その日記によると、明治二三年にはすでにこの問題について積極的に活動していたようである。彼は二三年に発表した意見書で、「一、皇室の基礎たり國體の根據たる神社は、上下之を尊崇し、君民之

に敬事し、以て其依所を定め其結合を固くすべき事

一、宮中に神祇を管する完全なる一局を置き、伊勢兩宮はじめ賢所、神殿、皇靈殿並に全國の官國幣社を所管となし、古義に因り、職務の區別を判然たらしむる事

一、神祇の長官は親任官となし、官國幣社の名称を廃して官社と称し、別に内規を設けて、取扱の法を定むべき事

一、官國幣社十五ヶ年の保存金を廃し、元の経費額に復すべき事

一、官國幣社以外の由緒正しき神社を准官社とし、人心の尊敬を喚起し、忠孝の風を鞏固にする事

という五ヶ条を主張し、宮内大臣の土方久元や元老院議長柳原前光らに働きかけたという。次いで翌二三年六月佐々木は、

「神祇を崇祀するは皇國固有の禮典にして、神武天皇創業の時祭政一致の訓謨を垂れたまひしより、歷朝國家の大事は必ず之れを神祇に告祭し、天災・地変・人妖亦之れを神祇に由りて祈禳し、以て國家の安寧を永久に扶持することを得たり、明治維新の初祭政一致の古制に復するの旨を布令し、尋いで神祇官を再興したるは、蓋し廟議此に見る所ありしを以てなり、今や祭祀の式典は式部寮職掌の一部と為り、神祇の事幾ど告朔の餼羊視せられんとし、皇國特有の美風或は將に頽廢せんとす、今にして匡正することなくんば、風俗は愈々輕躁に陥り、人心は益々危險に趨り、遂に潰溢横流して不測の禍害を皇室に波及するの虞なしとせず、豈畏懼戒心せざるべけんや、宜しく今の時に當りて、明治維新の初を顧念し、再び當時の廟議を繼續するに力むべし、然れども時勢は變遷して常に一ならず、故に祭政一致は必ずしも其の名に拘

泥するを要せず、其の實を取り、人をして神祇を崇祀するは皇國固有の禮典たるの道理を知らしむるを肝要とす、仍りて神祇司を宮内省中に創置し、正・權正・佑・令史の職を置き、皇族又は公爵以上を以て正と爲し、宮中の神祇祭祀及び神宮・官國幣社並びに神職のことを司らしむべし

との意見書を山県有朋に提出したが、これに対しては「山縣は神祇に対して敬遠主義を執り、土方は冷淡、柳原は賛成、吉井は熱心なる同意者、西郷は其の智識なきゆゑ専門家に調査を命じた」という如く、未だ十分な手応えを得なかつたようである。その為同年九月二十四日佐々木は更に「枢密顧問官子爵佐野常民、宮内次官伯爵吉井友実、元老院議員子爵海江田信義、同男爵千家尊福、同丸山作樂、内務省社寺局長国重正文」等と連名で、「司法大臣山田顯義に就きて、（神祇院設置の……注、引用者……）建議書を内閣総理大臣山縣有朋に呈し、別に枢密院議長伯爵大木喬任及び各大臣にも之を呈す」と政府に対する運動を強めた。⁽³¹⁾ この建議はその冒頭において、

「今や帝國議會の開期太だ迫れり、是れよりして憲法實施の事に就かんとす。此の時に際して立憲政治を挙行せんとする其の最先著手には國家の秩序を維持し、民心の統一を鞏固にするより、重要且急務なるはなし。國家の秩序整然として立ち、内には憲法政治の實挙り、外には國家獨立の體面を保つを得べし。而して國家の秩序を維持するは、其の基礎を定むるより善きはなく、民心の統一を鞏固にするは其の標準を立つるより善きはなし、國家の歴史に照らし、千古不變の國體に據りて基礎を定め、國家の感情に基き、忠君愛國の皇猷に随ひて民心の

統一を鞏くすべきなり。此の國體、此の皇猷は神祇官の必要を感じる一二にして止らず

と、きわめてはつきりと、神祇院設置の必要性を、国会開設・立憲政治の開始に先立つて権力による上からの國家統一の爲のイデオロギーを強固にする手段として國家神道体制の確立を述べているのである。⁽³⁴⁾

山県はこの建議案を閣議に諮ることとし、閣議においては山田顯義が、当然のことながら熱心にこれを推した。山田自身も、佐々木達の建議とは別に一〇月初に、吉井友実・海江田信義らと神祇に関する独立官衙を宮内省中に設置すべしとの建議書を提出していた。山田の考えも前掲の佐々木らの建議とはほぼ同様であり、二三年のものと思われる別の意見書に於いても、まず「神祇官ハ憲法實施ノ前ニ必ス決行セラルヘキ事」として「憲法ハ国会開場ノ日ヨリ實施セラルヘシ、又必ス實施ヲ猶豫スヘカラサルモノナリ、而シテ既ニ其憲法中ニ宗教ハ自由ニ任スルノ例文ヲ揭示セラル、玆ニ於テ神祇ノ礼典ト宗教ノ儀式ヲ判然分別セサレハ、其ノ憲法ニ非常ノ關係ヲ生シ、遂ニ云フヘカラサル困難ヲ惹起センモ計リ難シ」と述べ、特に神祇と宗教を區別することを強調し、その區別をはつきりさせる制令も必要であり、「神祇ノ礼典」も「議會ニ附セサルヲ得サル場合モ出テ来ラン」ことを恐れるのである。またそもそも明治五年の教部省が神官僧侶を共に教導職としたことや、内務省の社寺局が現在迄神社と寺院の事務を區別せずに扱っていることなどが、神道と宗教を混同させる原因であるとして、「特殊ニ神祇ノ官衙ヲ設置セラレ、官制事務ヲ異ニシ、区分ヲ判然トシ、後來其紛レ無カラランコトヲ要ス」と主張したのである。⁽³⁵⁾

山田・吉井らは神祇院設置の実現をめざして、一〇月より活発な運動を開始した。

一〇月三日付の吉井宛山田書簡⁽³⁸⁾は、次の如く述べている。即ち、

「本日午後土方大臣ニ面会縷々相談仕候處同氏ハ大体ニ於てハ飽迄同意ニ候得共只宮中ニ被属候より行政部内ニ被置度と申居候ニ付行政部内ニ被置ハ可然候へ共今突然新官衙を設立候時ハ御一新の節之神祇官を復再興候哉との感想を内外世人ニ生しめん事と今一ツハ現今宮中之神殿ニ被為在候天神地祇之社殿を神祇官ニ移し其神々之内ニ而も宮中ニ在ルべきものと神祇官に在ルヘキモノト祭典費其外之區別ヲナササルヘカラス終ニハ帝室費之御遣ヒ分之区分之當否ヲ議會ニ而評論スルヤモ難計との懸念も有之候ニ付不得已提出シタル意見書之通被行候より致方有之ましくと申候處尚熟考可致ト申事ニ付無據其俣ニ而相分申候其節同人之談ニ過日佐々木之意見書ニ付聖上より伊藤へ御下問相成候處同氏ハ不可然ト口答申上候由因テ此度も昨日差上候書面を山崎直胤ニ持せ御遣相成意見御尋被成候よし右ニ付山崎之如き國典ニ暗き人物御遣相成候ハ不可然伊藤ニ而も他事ト違ヒ神祇之事ハ不案内ニ可有之と存候故誰歟別人御遣相成候而ハ如何ト申候へ共既ニ其旨本人江相達候と申事ニ付致方無御座候前述之都合ニ御座候間伊藤之一言實ニ成否ニ関係致候間海江田丸山両氏之内一名又ハ兩名明朝より小田原ニ出懸歴史上必要之點より近來人心之此事之為騷擾致居候等委數懇話相成候而ハ如何可有之哉御考次第丸山御呼寄被成右之趣御相談相願度候山崎ハ今夕出立候歟又ハ明朝出立可致と存候ニ付其機ニおくれざる様專一と存候為右早々敬具

というものである。これによれば三日午後山田は宮内大臣の土方久元と

面談、同意を求めたが土方の態度は不鮮明であること、また天皇がこの問題につき伊藤博文に下問を命じており、土方がこの件について山崎直胤を小田原に派遣する予定であることなどを報じ、「伊藤モ他事ト違ヒ神祇ノ事ハ不案内ニ可有之ト存候」「伊藤之一言實ニ成否ニ関係致候間、海江田、丸山両氏之内一名又ハ兩名」を明朝にも小田原に遣して、伊藤に説く必要があると勧めている。吉井はこの書簡に接して、同日直ちに、

「拜見 小田原伯之一言誠ニ大事之場合御同感之事ニ而既ニ元田と申合一封ツ、是非宣勘考致シ給リ候様申遣候積ニ候。猶丸山江明朝談合、是非氣張呉候様尽力可仕候。土方之不決断ニ而如此大事ニ立至リ残念至極ニ候。猶拜願可申承、貴酬のミ荒々如此候也

十月三日

友実

山田盟臺

との返書を山田に送っている。吉井が直ちに元田と打合せ、丸山作樂と連絡したことがわかる。丸山は翌朝吉井と面談後早速小田原へ出発していることも、翌四日付の吉井の山田宛書簡に明らかである。更に吉井は自らも直ちに伊藤へ宛てて「陳は今般神祇官御復興之儀建白ニ及候處、内閣之評議ハ一決、猶閣下之御異見御尋に相成候由、何卒此節の御手厚き御崇敬之道天下ニ相願ひ候様類に不堪希望候。宣御勘考可被下候」と、賛成を求める書簡を発している。⁽⁴²⁾

元田永孚も吉井からの連絡により早速行動を起している。同三日付で伊藤に宛てた元田の書簡は、山田・吉井・佐野・海江田等の神祇官復興の建議が、閣議でも内決に至ったが、土方宮内大臣が「異見有之、聖聴

にも相達し、天皇から「貴官」へ「御下問」とのことであり、「就而は御返答次第二可否一決可致、誠ニ大事之御一言と奉存候」。また神祇官設置のことは目下「全国之神官並敬神固結党」も「鳩首相待居」ところであり、「閣下と宮内大臣との一言ニ而大典興復之議破毀ニ至り候得ば、如何成る感覚を惹起し可申哉」と「於迂老而へ杞憂切迫悚然に堪へ不申」と、ややおどしめいた言葉を用いて、強く伊藤の賛成を求めている。元田は続けて、神祇院設立は「素より宗教に差障りも無之、偏に御尊崇の大体を顯明致し候迄之主意に有之候。之を要するに神祇官を興すと興さざるとは、誠敬上より申せば無論起すを至当とし、知見政略上より申しても興せば全国敬神党之人心を帝室に收拾し、興さざれば此党の怨憤を帝室に來たし、利害得失見易きもの」であると、自らの見解を述べている。⁽⁴⁴⁾これが前述の佐々木や山田らの意見を一步進めて支援するものであることは明らかであろう。なお元田は同三日「然ば今般神祇院御設置御尽力之御模様吉井より伝承仕居、実に国家之大典御興復、慶幸之至に堪へ不申、何卒速に御許可之御運びに相成度、冥々中老生にも聊尽力仕度、一層之御尽忠奉企望候」と、山田顕義に激励と支援を表明している。⁽⁴⁵⁾

さて以上の如く土方、吉井、元田からの働きかけをうけた伊藤博文は、翌四日、元田にあてて「……然ば神祇官御再興之儀、閣議一決之趣細縷蒙諭示、乍早晚御懇情不堪感謝候。勿論神祇御尊崇之事に付、異見可申上道理無之、官職御制定に付ては、当局之御原議可有之事に而、局外之小臣非何可容汚啄と奉存候。右之趣旨を以宮内長次官へ可及回答候。」との返書を送った。⁽⁴⁶⁾伊藤の従来の考え方を良く知っていた元田らの心配に反して、伊藤は思いの外あっさりと賛成を表明したのである。⁽⁴⁸⁾おそら

くはそのためもあろうか、神祇院設立は閣議において一旦は了承されたかの如くであった。一〇月一〇日頃山県は法制局長官の井上毅に意見を求めている。同日付の山県への井上書簡は、「神祇院ノ件各大臣皆捺印賛成ニテ西野文太郎太慶ト存候ヘト、生ハ御下問ニ応候テ無忌憚別冊意見書奉供御参考候」と述べている。⁽⁴⁹⁾その「別冊意見書」において井上は、神祇院設立の趣旨には「一理アルヲ認ムルト雖」も、「神氏」を国家の非宗教の「礼典」であるとするこゝと、及び「神祇院」を天皇の「直隸独立ノ物」とすること、については「未タ全ク同意ヲ表スルコト」はできないという。その理由は「其ノ国礼典ニ属スルカ故ニ国務ノ一部ナリトセハ此レ誤謬ノ甚キ者ニシテ、礼典ハ社会ノ事物ニシテ国務ノ事物ニ非ス、君主ハ国務ノ首長タルノミナラス、又社会ノ師表タリ、而シテ国務ノ事ハ之ヲ政府ニ任シ、社会ノ事ハ王家自ラ之ヲ變理ス、礼典ハ宣ク王家ノ内事ニ属スヘクシテ之ヲ国務ニ混スヘカラス」というのである。井上は神祇（祖宗ノ神事）を「社会ノ事物」と見なすことによって、それを宮内省に属させるべきであるとする。「祭祀敬神ノ道ハ其ノ宗教タルト然ラサルトニ論ナク」、「国務」ではないということにより政教分離の原則に反しないことになるのである。これはかなり危うい解釈のように思われる。

井上は結局以後もこの立場から元田と協議して宮中に神祇局を置くという案を作つて、この問題の一応の解決に力を添えている。⁽⁵¹⁾

以上の如く神祇院の設置は一〇月上旬には閣議において一旦は決定したかの如く見えた。しかしその後直ちに実施決定には至っていないのである。そのことは例えば一〇月二二日付の吉井宛の元田書簡に「……神祇官一条、未相運び不申候由、御憂念可被成と深察仕候……」とあるこ

とらもうかがえる。教育勅語の発布の翌日、一〇月三十一日、佐々木高行は元田と懇談、元田は、この勅語の「精神を以ても神祇御崇敬の義は十分擴張は無論と存候も、何分其處までは不相分」と述べて、佐々木と二人で「嘆息致し候」という状況であった。⁽⁵³⁾その状況は、一月に入ってもなお山田顕義が三条実美に対して「：神祇官一件ハ於今決定仕不申、専ら尽力中に御坐候⁽⁵⁴⁾」と報じなければならなかったり、元田永孚も山田に対して「神祇一条御配慮可被成、老心冥々裡に尽力可仕候得共、何分簡明之御取調御急決相祈居申候。学者輩神官流之外にすらりと御運びに相成度、猶御配慮有之候様奉存候⁽⁵⁵⁾」とはっぱをかけたりにしている状況が続いていたのである。

佐々木高行は一月初旬に「一神祇の礼典は宗教の儀式にあらざる事、一祭政一致と政教一致とは大なる区別ある事、一神社と教会とは判然と分離せしむべき事、一神祇官設置は必らず憲法実施前に決行すべき事、一神祇官は独立せしむるも宮内省に置かるゝも之を撰ばず只速に設置する事、一皇祖の遺訓は無窮に実施せざるべからざる事、一神祇の礼典は皇祖皇宗の遺訓遺制なる事」という意見書を発表して、なお議會開院前の実現を追求している。一月二八日帝國議會の開会前日、佐々木、吉井、丸山の三名は、⁽⁵⁶⁾なお山県総理大臣に対して、憲法実施前の神祇官設置の建議書を提出したが、⁽⁵⁷⁾結局実現を見ず、神祇院設置問題は懸案のまま保留されることとなった。⁽⁵⁸⁾

四 おわりにかえて

神祇院の設置が、一旦は決まりかけたに見えながら結局保留されるに至ったのは、一つには閣内に強い反対意見が存在した為である。それは

既に先学により指摘されている如く、外務大臣青木周蔵と、彼を支持する陸軍次官桂太郎、枢密顧問官野村靖であった。青木は「条約改正の議漸く將に緒に就かんとする所あるに、神祇官などといふ一大庁を然も独立に設置さるゝに至らば、日本の国教は神道なり、神道教など異教国の法律を奉ずる能はず抔改正上の一大障害たるや必然なり」と、神祇院設置は条約改正の障害になると強く反対したという。いうまでもなく条約改正は明治政府にとつての最重要課題の一つであった。しかも明治二〇年、二二年と二度にわたり、井上馨と大隈重信の条約改正交渉が、国内の反対勢力の圧力により失敗しており、その後をうけた青木外相は、外国からの圧力、国内の反対派の圧力のもとで、政府主導で改正を成功させるべく、神祇院設置が国教制に通じるとして改正の大きな障害になると反対したのである。

以上のように神祇院設置問題は、一三年の九月・一〇月にかけて政府部内を中心に活発な動きを生み出していた。設置論者、反対論者について考えると、この時期に、議會開設前の政策として、教育勅語発布と神祇院設置に力点をおき、国民統一・教化を重視するか、同じく議會開設前に条約改正交渉に関して少しでも政府主導による交渉の進展を重視するか、のちがいが大きかったのであろう。そう考えると、神祇院設置論者として挙げられる人々、即ち佐々木高行、吉井友実、元田永孚、佐野常民、海江田信義、丸山作樂等が、井上・大隈の条約改正交渉について⁽⁶¹⁾は強硬な反対派のメンバーであったことは注目すべきことと思われる。元田永孚のこの問題についての関わり方とその活動、及びその思想については、本文中で考察したところでもあるが、未だ十分なものと言いき、更に今後の課題としたい。

注

(1) この問題については従来は神道史研究などで主として扱われて来た。本稿においてはその理解について主として次の各研究に負うところが大きい。

西田広義「明治以降神社法制史の一断面」(『神道百年史』第四巻所収)

阪本健一『明治神道史の研究』(国書刊行会)

村上重良『国家神道』(岩波新書)

稲田正次『教育勅語成立過程の研究』(講談社)

宮地正人『天皇制の政治史的研究』(校倉書房)

中島三千男「『明治憲法体制』の確立と国家のイデオロギー政策」

(『日本史研究』一七六号)

(2) 元田永孚は文政元年肥後熊本藩士に生れ、青年時代横井小楠の思想的影響を強く受け、自らもその実学思想の継承者を任じている。明治四年以降侍講として明治天皇に仕え、その「君徳輔導」に力を尽し、明治一〇年代前半には侍講兼侍補として、佐々木高行・土方久元・吉井友実等と共に政府の藩閥専制を批判して天皇親政運動を展開、明治一四年政変の過程では、佐々木や谷干城らの中正派と同一の立場をとり、政変後も侍講として天皇の側近的立場を保持し続け、明治一九年二月宮中顧問官に任ぜられ、ついで二二年五月枢密顧問官に任ぜられている。明治二四年一月七四才で没。男爵を授けられた。筆者はこれまで「元田永孚の思想形成」(弘前大学『文経論叢』一一一四)、「元田永孚と『君徳輔導』論」(同一一三)

四)、「壬午事変後における元田永孚の朝鮮政策案」(『青山史学』六)、「元田永孚と明治二年条約改正反対運動」(『日本歴史』四四四)などで、元田の思想について検討を行ってきた。本稿もその為のささやかな試みの一つである。

(3) 稲田前掲書、及び山室信一「天皇の聖別化と『国教』論」(『近代熊本』二二)など。

(4) 筆者は元田永孚の書簡を、元田の曾孫元田竹彦と共同して収集解説を進めていたが、その成果を『元田永孚関係文書』として昭和六〇年七月山川出版社より刊行した。その作業の経過として多くの未刊書簡に接することができ、本稿において使用する書簡はそこから紹介するものである。また他に宮内庁書陵部蔵の山田伯爵家文書中からもこの問題についての山田顕義に関わる書簡数点を見出したのであわせて本稿中で紹介する。

(5) (6) 中島前掲論文。

(7) ただ「但府県郷村社以下神官ハ当分従前ノ通り」との但し書きを付けざるを得ない実情も存在していた。

(8) 宮地前掲書一五四頁。

(9) 関連事項を年表風に概観すると次の如くである。

明治 年月	事	項
一四・一〇	いわゆる明治一四年政変 社寺総代人制度改定	
一五・一	神官教導職の分離	
四	伊勢に皇学館設置	
五	氏子制度再編 (氏子氏神の変更を禁止する)	
六	東京に皇典講究所創設 各府県に分所置く	
八	府県社以下の神官の資格を 定める	山田顯義・吉岡徳明等の神 祇官復興建議 元田永孚「国教論」 三條宛 伊藤宛
一七・七	神社祭典費用の民費課出の廃止 ・教導職の廃止	
二〇・三	官国幣社保存金制度実施 (内務省訓令)	
二二・二	帝国憲法発布	
一〇	皇典講究所内に日本法律 学校創設	
一一		神官同志会組織さる

一一二		
二三・一		「郷村社処遇ニ関スル意見書」 (芦部磯夫、穂積耕雲、芳賀真 咲 総代) 「神官制度改正ニ関スル意見書」 (同前総代) 〓九月迄元老院への神社宗教分 離建白(四百件と云う) 東京で神職会合、神官同盟結成
七	皇典講究所内に国学院創設	
九	政府内で神祇院設置が 問題となる	
一〇	教育勅語発布	
一一	官国幣社保存金制度 年限を明治二〇年度より 三〇年間延長 帝国議會開院式 府県郷社神官奉務規則 改正(内務省訓令)	
二四・七	……以下略ス……	

(10) 『憲法義解』(岩波文庫版)

(11) 明治二十二年二月「神道ニ関スル諸件」(国会図書館憲政資料室蔵「憲政史編纂会収集史料」四九四号)

千家は出雲大社国造家の出であり、祭神論争などでは神道宗教化の志向を保って活動を行っていた。千家の活動については藤井貞文『明治国学発生の研究』(吉川弘文館)など参照。

(12) この憲法の「告文」は宮中三殿の賢所に奉ぜられたのであるが、それが官報に公布されたということは、神道が実質的に国教の取扱いをうけていることを示している。

(13) 宮地前掲書一五三頁など。

(14) 宮地前掲書一五六～一五九頁参照。

宮地氏の指摘はきわめて示唆に富むものであり、特に二十二年八月、西沢之助主宰の国光社が創刊した『国光』が、貴族院・枢密院レベルの人々を結集しており、創刊号には元田永孚、岩下方平、海江田信義、西村茂樹等が寄稿し、土方久元・佐野常民・吉井友実・高崎正風等が詩や和歌を寄せていたという指摘は、後述の神祇院設置運動に積極的に賛成した人々と重なる点で興味深い。今後の課題として、『国光』の思想分析等を行わねばならないと思っている。

(15) 宮地前掲書一五九頁。

(16) 西田前掲論文参照。及び注(9)参照。

(17) 山田顕義は内務卿であった明治一五年皇典講究所の設立に尽力し、二十二年一月には司法大臣のまま同所長に就任している。同年一〇月の日本法律学校の創設を行い、更には国学院の創設も彼によるもの

と言える。このような山田の立場は、彼が早くから神祇官復興問題に関わっていたことと無関係ではないと言えよう。なお国学院の設立には井上毅も重要な役割を果たしており、例えば明治一四年五月には伊藤博文と「国書取調とか国学院設立とか之方」(『井上毅伝史料篇第四』三三七頁)を協議している。元田永孚も関係していたことは、次の書簡よりうかがえる。

「御清祥可被為在、欣賀仕候。陳ば先比御氣付被成下候国文学学校主意書、尔後色々研究の末別紙の通粗論定仕候。是にて如何可有之哉。東西洋之論理を合一せしむるは、甚困難の場合も不少候間、不惡御推恕奉願候。草々敬具

六月十九日 顯義

元田老台

(明治二十三年六月十九日、元田永孚宛山田顕義書簡、『元田永孚関係文書』三九〇頁所収)。なお書簡中の「国文学学校主意書」は海後宗臣「元田永孚」(文教書院)所収の「私立国文学学校建設趣旨書」と同じものと思われる。

(18) 宮内庁書陵部蔵「木山田伯爵家文書」へ所収。

(19) 『保古飛呂比佐々木高行日記 一〇』明治一四年一二月三〇日条。

またこの元田書簡に対する佐々木高行の返書には「…神祇官再興之事は、過日一度御評議御座候得共、議論紛々に而、年内には御決定に不相成候。右様之景況ニ而、何事も差急御運相成候事件は一つも無之、右辺之事情篤と御内話、御高慮相同度存候…」とある。

(『元田永孚関係文書』三二六頁)

(20) 注(2)拙稿参照。また渡辺昭夫氏の「侍補制度と天皇親政運動」

『歴史学研究』二五二及び「天皇制国家形成途上における『天皇親政』の思想と運動」(同二五四)を参照。

(21) 前注渡辺論文。

(22) この点については稲田前掲書四一～五二頁に詳しい。

(23) 元田竹彦氏所蔵文書。

(24) これが儒教的倫理そのままであることは一見して明らかであり、そこには彼の儒教主義の堅固さを見ることができる。

(25) このことは、元田竹彦氏所蔵文書中にある明治一三年一〇月の日付をもつ「国憲大綱」の条文中にも明白に示されている。

「国憲大綱」

一、大日本国ハ天孫一系ノ皇統萬世ニ君臨ス

一、日本国ノ人民ハ萬世一系ノ天皇ヲ敬載ス何等ノ事変アリトモ此天皇ニ背クコトヲ得ス

一、国教ハ仁義礼讓忠孝正直ヲ以テ主義トス君民上下政憲法律此主義ヲ離ル、コトヲ得ス

一、天皇ハ神聖ニシテ犯スヘカラス何等ノ事変アリトモ其神體ニ管セス

一、天皇ハ全国治教ノ權ヲ統フ

一、天皇ハ全国人民ノ賞罰黜陟生殺ノ權ヲ統フ一ニ憲法ニ拠テ處断ス

一、人民ハ身體居住財産自由ノ權ヲ有ス法律ニ非レハ妄ニ其權ヲ制スルコトヲ得ス

以下諸憲其目的多條ナリ、其主任者ノ撰奏スル所ニヨル。但右ノ七條ハ皇国君民ノ間必要ノ目ナリ、仍テ之ヲ掲載シ以テ乙覽ニ備フ

特に第一、二、三、五の各条文に注目されたい。「治教一致」の

「教」は「国教」であるが、「教化」でもあることがわかる。なお、この考え方が政府当局者にうけ入れられることはなかった。例えば

明治一四年六月、岩倉具視が井上毅に命じて起草させた「憲法綱領」(『岩倉公実記』下)の中にも、天皇の「治教の権」という語はな

かったのである。

(26) 元田竹彦氏所蔵文書。

これについては稲田前掲書一一二～一一三頁参照。なお元田竹彦氏所蔵文書中には、同じく明治一七年八月に伊藤博文に呈した国教論

についての意見書も存在する。それについても稲田前掲書一〇八～一一一頁参照。

(27) 津田茂磨『明治聖上と臣高行』(以下『臣高行』と略記する)六九四～七〇九頁参照。

(28) もつとも注(19)などで見た明治一四年末の元田との往復書簡によれば、二二年よりずっと以前から活動していたと言うこともできる。

(29) 『臣高行』六九六頁。

(30) 『明治天皇紀』第七、五七三～五七四頁。

(31) 『臣高行』六九六頁。

(32) 『明治天皇紀』第七、六三六頁。

この建議書の主旨は前引の意見書とはほぼ同様ながらきわめて長文のものである。『臣高行』六九八～七〇四頁参照。また稲田前掲書

三〇五～三〇七頁にも詳しい。

(33) 前述したようにこの年九月二五日に東京で神職一同の会合があり、

二七日には神官同盟が結成され神官側からの運動も強まり、その動きと連動していると考えられる。

(34) 『臣高行』六九八頁。

(35) この点についても同意見書中に「……国会の開設たる個人的権利を重んずるの徒之を唱道し之を改革せんとす。……中略……夫れ敬神尊王は建国立極の大義にして、一日も忽緒に附すべからず、今に於て敬神の典を明にし、尊王の道を講じ、祖宗の訓護を明徴し、国家統一の思想を鞏固にするにあらずんば、恐くは不逞の徒、其の間に輩出し、萬世の大計を怠るも亦知るべからず、之が豫防計画をなすは、佐命元勲の責任なり」(同前七〇二―七〇三頁)とはっきりと述べている。

(36) この建議書については稲田前掲書三〇七―三一二頁に詳しい。なお同文書は前述の書陵部蔵「山田伯爵家文書二」中に収められている。

(37) この意見書も書陵部蔵「山田伯爵家文書二」に収められている。

(38) 同前「山田伯爵家文書四」所収。

(39) 一〇月三日付伊藤博文宛土方久元書簡には「陳は神祇院新設云々之儀に付、陛下より賢台御意見御下問相成候間御勘考之上御上答被成下度、委細は山崎直胤へ申含め差出候に付文略仕候。迂生も罷出度候得共此節柄種々風聞を生し可申と存し態と相止り山崎を出候…下略…」とあり、うらづけられる。(『伊藤博文関係文書 第六卷』四五二頁)

(40) 「山田伯爵家文書四」所収。

(41) 全文は左の通りである。

「拝啓 今朝早ク丸山江面会、得意之雄弁ヲ振ふハ此時也と申聞候處、委細拝承勇ミ進ンて出発いたし候様、亦昨日元田え談合いた

し置候處、旨趣残る所なく相認態与家来老人差遣候由、是ハ余程功能可有之与存申候。只々小田原之一言萬々世迄之基礎相定ル場合、一向明答ヲ祈リ居申事ニ御坐候。此段形行申上候也。

十月四日

友実

山田顯義殿

」

(「山田伯爵家文書四」所収)

(42) 『伊藤博文関係文書 第八卷』二一六頁。

(43) 『明治天皇紀』によれば「元田永孚固より高行等の議を賛同し、侍従長侯爵徳大寺実則に依りて高行等の建議を奏上す」(七卷六三七頁)とあり、佐々木の意見書を天皇へとりつぐなどの行動があった。

(44) 『元田永孚関係文書』四三―四四頁。

(45) 同前書二三―二四頁。なお同書簡で元田は「神祇院之名称は、秘密・元老・貴族・衆議各院之名称と同唱に相成、祖宗に被為對御尊崇之區別分明に無之、殊に院之字寺院之唱も有之、其韻響不宣と愚考仕、願曰は古典之通りに神祇官と被成候而、何之支も無之のみならず、御尊崇の名称に通じ可申と奉存候」と、神祇官とすべきと述べている。このことは前引の伊藤宛の書簡でも主張していた。

(46) 『元田永孚関係文書』二七三頁。

(47) 前に述べたような、元田の「国教」論に対する伊藤の反対といったいきさつから、伊藤が反対意見を表明するのではないかと元田らが危惧したのは当然であった。

(48) 伊藤の態度について吉井は六日付書簡で山田に次のように知らせている。

「昨日被仰聞候山崎持帰り御返書今日一覽いたし候處、宮内大臣連名に而矢張り内閣一定決議ニ付而ハ御尊崇之儀ニ付何共異存無之、此上設立之方法ニ至テハ何モ内閣之御評議次第第二御決相成度、国家的之大事業ニ付宮内省ニ而兎角議論すへき事柄ニ而ハ有之間敷との事ニ而候由、一寸今日宮内大臣とも談合致候處、同人之見込ニも賞勲局之振合ニ内閣ニ而御治定役所ハ宮内省中ニ被召置可然歟との事候間、至極尤と申置候間、尚此上宣布御説可被下候。…」
（「山田伯爵家文書四」所収）。

(49) この書簡は前掲『井上毅傳史料篇第二』二八〇頁所収。またこの書簡については稲田前掲書三一四頁参照。

(50) 『井上毅伝史料篇第二』二八二頁。

(51) 明治三年一月五日付元田宛井上書簡〔別紙〕（『元田永孚関係文書』二九四頁）。

(52) 『元田永孚関係文書』二五六頁。

(53) 『臣高行』七〇七頁。

(54) これは憲政資料室蔵「三条実美文書」所収の明治三年一月一日付三条宛山田頭義書簡の一節である。全文は次の如くである。

「（端書 三條公閣下 頭義十一月十一日）

肅啓 一昨日は御書簡被下奮堂上方救助金支出方法之簾ニ付御配慮之趣敬承仕候。何と歟山縣・松方杯と相談尽力可仕候間、左様御含奉願候。神祇官一件ハ於今決定仕不申、専ら尽力中に御坐候。今朝参殿御答可申上覚悟ニ而御答も遷延仕候處、生憎無據急要出来不能其義、乍欠敬書面ニ而御答申上候。尚其内拜謁萬可申上候、草々謹

言 十一月十一日

(55) 明治三年一月三日付山田宛元田書簡（『元田永孚関係文書』一三三頁）。

(56) 『臣高行』七〇八頁。

(57) 『明治天皇紀第七』七〇二頁。

(58) 明治三年一月二七日の内務省訓令により、官国幣社への配布の年限を明治二〇年度より三〇年間延長が決定された。これは前述の一〇月一日付井上毅の意見書の末尾にあった「一保存金ノ期ヲ延ヘテ三十年トス」という方策の提示を採ったものである。

(59) 稲田前掲書、宮地前掲書など。

(60) 『日本新聞』一三年一月九日。

(61) 沼田前掲『日本歴史』論文参照。

なおその時の同志土方久元は、今回はむしろ消極的であり、司法大臣で元田らから攻撃された山田頭義が積極論と立場がいかわっている。（付記・本稿は、昭和六〇年三月、日本大学教育制度研究所に於て開かれた山田頭義文書研究会の席上で行った口頭報告を骨子としている。発表の機会を与えて下さった小川嘉子先生、及び拙い報告を聞いて下さった同研究会の方々へ御礼申し上げる。

また私事にわたるが、筆者が弘前大学を離れて既に九年目になるうとしている。歳月の移り変りに感慨をもよおすと共に、弘前大学国史研究会の一層の発展を祈念するものである。）

（青山学院大学文学部助教授）